

古代史を解明する会

## 第52回

# 「邪馬台国・卑弥呼と天孫族の関係」

2025年7月19日

丸地三郎

# 「史料批判」とは 複数のAIに聞いてみた！

## • A社

史料批判とは、歴史研究において、史料の信頼性や価値を評価する作業のことです。

史料は歴史の事実を伝えるための材料ですが、そのまま鵜呑みにするのではなく、様々な角度から検討し、その内容がどの程度信頼できるかを判断する必要があります。

史料批判は、大きく分けて以下の二つの段階に分けられます。

### 1. 外的批判:

史料の真偽、作成された時代や場所、筆者、伝来の経緯などを検証します。

例えば、偽造された史料でないか、誤記や改竄がないか、史料の出所や由来、伝播の経路などを調べます。

### 2. 内的批判:

史料の内容が信頼できるかどうかを検証します。

例えば、**史料の記述に矛盾がないか**、**他の史料と整合するか**、著者の立場や意図、時代背景などを考慮して、史料の内容を評価します。

史料批判は、歴史研究の基礎となる重要な作業であり、客観的な事実に基づいて歴史を解明するために不可欠です。

## • B社

前半省略

- 史料批判は、歴史研究の根幹をなす非常に重要な作業です。
- これを怠ると、誤った情報に基づいて歴史を解釈したり、虚偽の事実を認定したりする危険性があります。
- 歴史学者が客観的で正確な歴史像を構築するためには、常に厳密な史料批判が求められるのです。

- 古事記・日本書紀には、卑弥呼の名前も邪馬台国の記述も無い。
  - 『日本書紀』では、神功皇后が卑弥呼と同年代であるように示唆する記述があるが、これは作意によるものと指摘されていて、異なる時代に生きた人物であり、同一人物では無いとされている。
- 一方、信頼性の高いと言われる中国の史書：三国志の中の「魏志倭人伝」中には、魏の使者が卑弥呼に会うため、日本に行ったとする詳細な記述が残っている。
  - しかし、倭人伝中には、古事記・日本書紀に記載される天照大御神などの神々の記述は無い。
- 日本の古代史を記した、日本側の書籍と中国の史書の上に大きな溝がある。
- 疑念と疑念の間にあるテーマを解決するには、記紀と魏志倭人伝にまつわる問題がクリアになることが先決であった。
  - しかし、1. 古事記・日本書紀を歴史として解釈することは、過去には行われておらず、  
2. 魏志倭人伝の記述は、邪馬台国論争で混迷を極め、疑念に纏われていた。
- 邪馬台国・卑弥呼と天孫族・出雲族の関係が明確になるとすれば、魏志倭人伝の記述が、日本歴史の重要な材料として取り込むことができる。

# 日本書紀・神功皇后紀

能阿耨珥于多娜濃芝作沙  
魏志云明帝景初三年六月倭女王遣大夫難斗米等詣郡求詣天子朝獻太守鄧夏遣吏將送詣京都也  
 三十九年是年也大歲己未  
魏志云明帝景初三年六月倭女王遣大夫難斗米等詣郡求詣天子朝獻太守鄧夏遣吏將送詣京都也  
 四十年魏志云正始元年遣建忠校尉梯携等奉詔書印綬詣倭國也  
魏志云正始四年倭王復遣使大夫伊聲者掖耶約等八人上獻  
 四十六年春三月乙亥朔遣斯摩宿祢于卓淳  
斯摩宿祢者不知何姓人也於是卓淳王末錦早岐告斯  
 摩宿祢曰甲子年七月中百濟人父  
百濟人父白弥流

- 神功皇后摂政39年(239年)
    - 魏志云「明帝景初三年六月 倭女王 遣大夫難斗米等 詣郡求詣天子朝獻 太守鄧夏 遣吏將送詣京都也」
    - (訳:魏志によると明帝の景初3年6月、倭の女王は大夫の難升米等を郡(帯方郡)に遣わし天子への朝獻を求め、太守の劉夏は吏將をつけて都に送った)
  - 神功皇后摂政40年(240年)
    - 魏志云「正始元年 遣建忠校尉梯携等 奉詔書印綬 詣倭国也」
    - (訳:魏志によると正始元年、建中校尉の梯携らを遣わして倭國に詔書・印綬を与えた)
  - 神功皇后摂政43年(243年)
    - 魏志云「正始四年 倭王復遣使大夫伊聲者掖耶約等八人上獻」
    - (訳:魏志によると正始4年、倭王はまた大夫の伊聲者・掖邪狗たち8人を遣わして朝貢した)
  - 神功皇后摂政66年(266年)
    - 是年 晋武帝泰初二年晋起居注云「武帝泰初二年十月 倭女王遣重譯貢獻」
    - (訳:この年は晋の武帝の泰初(泰始の誤り)2年である。晋の起居注という記録によると泰初2年10月に倭の女王が使者を送り通訳を重ねて朝貢した)
- ✓ 不正確な引用文で、神功皇后を卑弥呼になぞらえようとした、作為の文章で、信憑性のない記述。

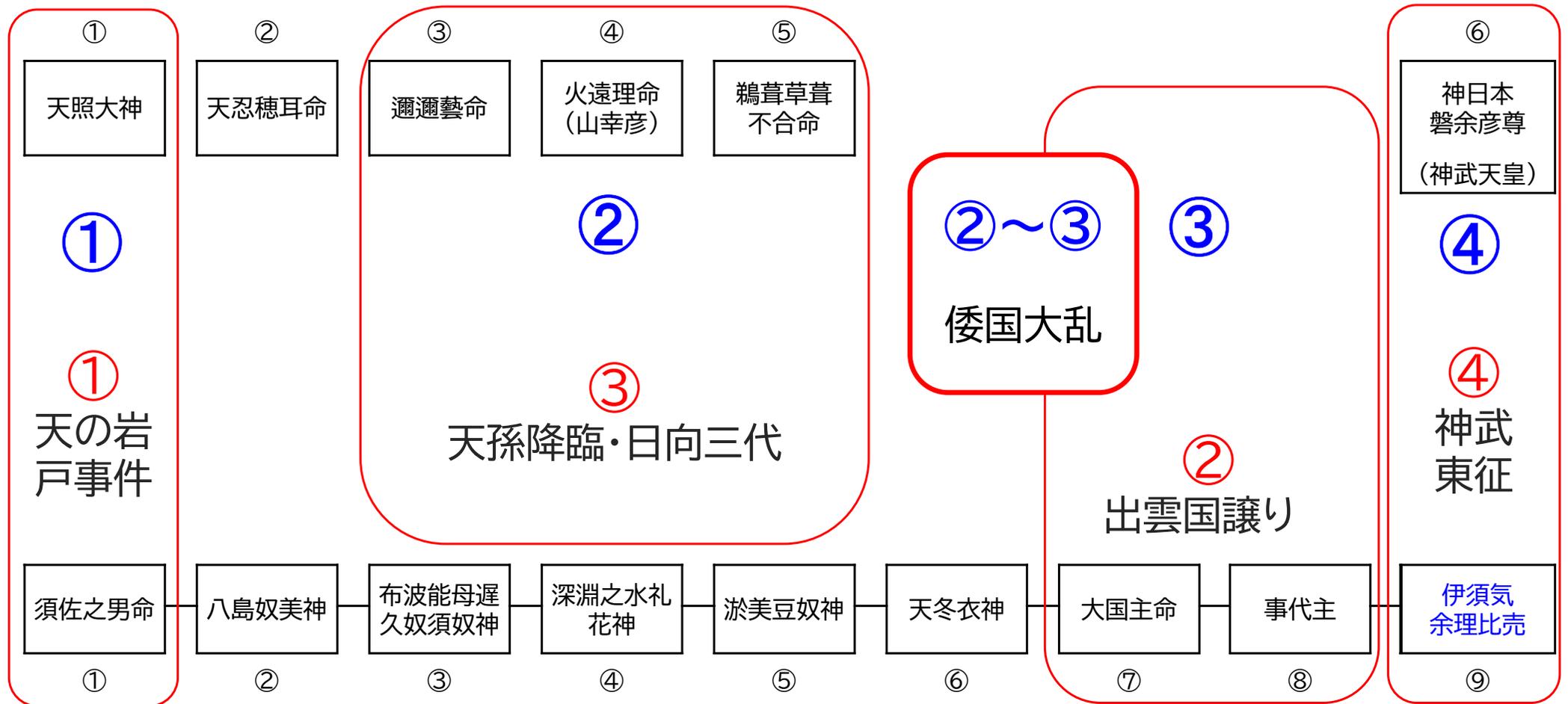
- 当会の古代史を解明する会では、記紀の歴史としての読み・解釈し、考古学資料との整合性を行った。
  - 文献と考古資料の対応シリーズ(第37回～43回)で取り上げ、記している。
    - 37.「文献と考古資料の対応:天孫降臨・日向三代」
    - 40.「文献と考古資料の対応:出雲国譲り」
    - 41.「文献と考古資料の対応:神武東征」
    - 43.「文献と考古の対応:神話の時代全体」
- 古事記・日本書紀に記載された記紀神話の登場人物と事件を改めて調べ直した結果、
  - 記紀の物語・事件の記載の順番は、変更されており、登場人物の系譜の順に従い、物語・事件の順を置き換えると、時間軸のそろった歴史となる。
  - 記載された物語・事件の一つ一つを整理して、考古学の成果に照らし合わせると、明確に一致することが判明した。
  - しかし、考古学資料を分析すると、大きな戦争の遺跡が存在するが、古事記・日本書紀には記載が無い。
    - その戦争が、出雲国譲り前に起きたものとする、国譲り中の記述が無理なく読める。又、この戦争を省くために、物語全体の記述順が歪められたことが理解できる。
  - 従って、以下の物語・事件の順に歴史が起き、記述されていたことが判明した。
    - 天照大神と須佐之男命の対立/天岩戸事件/須佐之男命の追放
    - 天孫降臨/海彦・山彦の話
    - 九州での天孫族と出雲族の決戦(記載なし)
    - 出雲の国譲り
    - 神武東征
  - 尚、「記紀の物語・事件の記載の順番の変更」は、岩波書店の日本書紀の天の岩戸事件と天孫降臨の注記にも指摘が存在した。
    - 岩波文庫本 日本書紀(一) P131 注十五

- 魏志倭人伝の邪馬台国・卑弥呼の記述
  - 邪馬台国論争で、邪馬台国の位置が定まらず、混迷を極め、疑念に覆われた状態が続いた。
    - 特に倭国内の旅程部分が不明瞭で、解釈の仕方が複数有り得る記述となっている。
    - この不明瞭な記述から、邪馬台国に至る経路が不明となり、定まらない状態(邪馬台国論争)が続いた。
  - 魏志倭人伝の記述を、「史料批判」することにより、
    - 陳寿の記述の元となった文献が以下のものであることが判る
      - 以前の史書
      - 魏の朝廷内に保管された
        - 公文書
        - 外交文書
      - 倭国(日本)訪問記録文書
        - 梯儁の訪問記録
        - 張政の訪問記録
    - 前半の倭国への旅程から倭国の風俗・習慣・歴史・邪馬台国の概要を記した倭国紹介の記述がある。
      - この記述は、
        1. 内容から梯儁の訪問団の調査記録とみられるが、初回訪問時には把握できなかった内容が所々に挿入されている。
        2. 前後の文脈と矛盾する文章が挿入されている。
      - 挿入された文章を排除し、元の梯儁訪問記録部分だけにしてみると、論旨明快な素晴らしい一つの民族紹介の文章であることが判明する。
      - 挿入された文章は、3ヶ所に有り、
        - 2件は、後の時期に訪問した張政の報告を基に記載されたもの。
        - 1件は、投馬国に関するもの。
  - この投馬国に関する記述が、旅程のポイントとなるため次頁に記す。

- 三国志:魏志/呉志/蜀志の外交戦略
  - 魏と倭の外交は、三国志の外交戦略の一貫として解釈される必要がある。
  - 魏の外交戦略は、魏志・呉志の両方から、多くの使節が虐殺される結果を生じる厳しい戦略が行われていた。
    - 魏は、呉との対抗上、**二股外交を許さず、武力弾圧**を連用して来た。
  - 同じ陳寿の記述した呉志には、呉の会稽を定期的に訪問し、**外交関係を持つ倭人のこと**が記載される。
    - 魏志倭人伝の記載にあたって、呉と外交関係を持っていた**琉球・沖縄の倭人と、倭国(邪馬台国)の違い**を明確にする必要性が存在したと見られる。
- 初回の梯儁の訪問団の調査記録は、この投馬国に関する文章を除外すると、邪馬台国への旅程の記述は、極めて整然としたものになる。
  - 旅程は、里数で数え、水行千余里×7と陸行計700余里となる。
  - 途中の国々は、戸数と里数を略載できたと記す。
  - **サマリーの記載がされている。**
    - 日数が記載され、水行10日と陸行1月
    - 里数合計が1万2千里。
  - 魏の帯方郡から邪馬台国へは、水行10日と陸行1月であるのに対し、
    - 邪馬台国から投馬国へは、水行20日と記され、2倍ほどの遠絶な地で、邪馬台国自体と投馬国は、直接関係ない無いことが、容易に理解できる。(陳寿は、そのつもりで、投馬国の文章を追加した筈。)
- 陳寿の記述
  - 宋の文帝は、陳寿の記述内容は「**簡潔に過ぎる**」と考え、裴松之に命じて「注」をつけさせたと伝わる。
  - 上記と伝わるように、「**簡潔を求め過ぎた**」陳寿が、必要な説明を抜かし、投馬国の記述を挿入したために、旅程の理解に混乱を生じたものとする。
- 魏志倭人伝の旅程が明確になると、
  - 九州上陸から邪馬台国までが、旅程通りに解明でき、邪馬台国の位置が判明した。

- 古事記・日本書紀の歴史としての読み方・解釈が明確になり、物語・事件が、考古学上の証拠とも合致した。
- 一方、魏志倭人伝の旅程の読み方・解釈が明確になり、旅程が確定し、邪馬台国の位置が判明した。
  - しかし、記紀の神話に記載された内容と、邪馬台国・卑弥呼は直接的に重なることは無い。
- この記紀と魏志倭人伝の各々の記載した内容を事実として、時間的・空間的に並べてみると、
  - 記紀に邪馬台国・卑弥呼の記載が無いこと
  - 魏志倭人伝に、天孫族・出雲族の記載が無いこと
  - 何故、記載が無いのか？
  - 記載が無いことが、当たり前なのか？  
これらの回答が浮かびあがるものと期待する。
- 時代的に見て、関連性の高い部分・年代を探す。
  - 関連性が高い部分について全体・環境調べる。
    - 天孫族側の年代や状況・問題を確認する
      - 卑弥呼側の年代や状況・問題を確認する。
        - 天孫族側の状況と卑弥呼側の状況を比較し、接点を探す。
          - これが可能ならば、卑弥呼と天孫族の関係が判明する。

# 記紀神話の歴史として読む順序

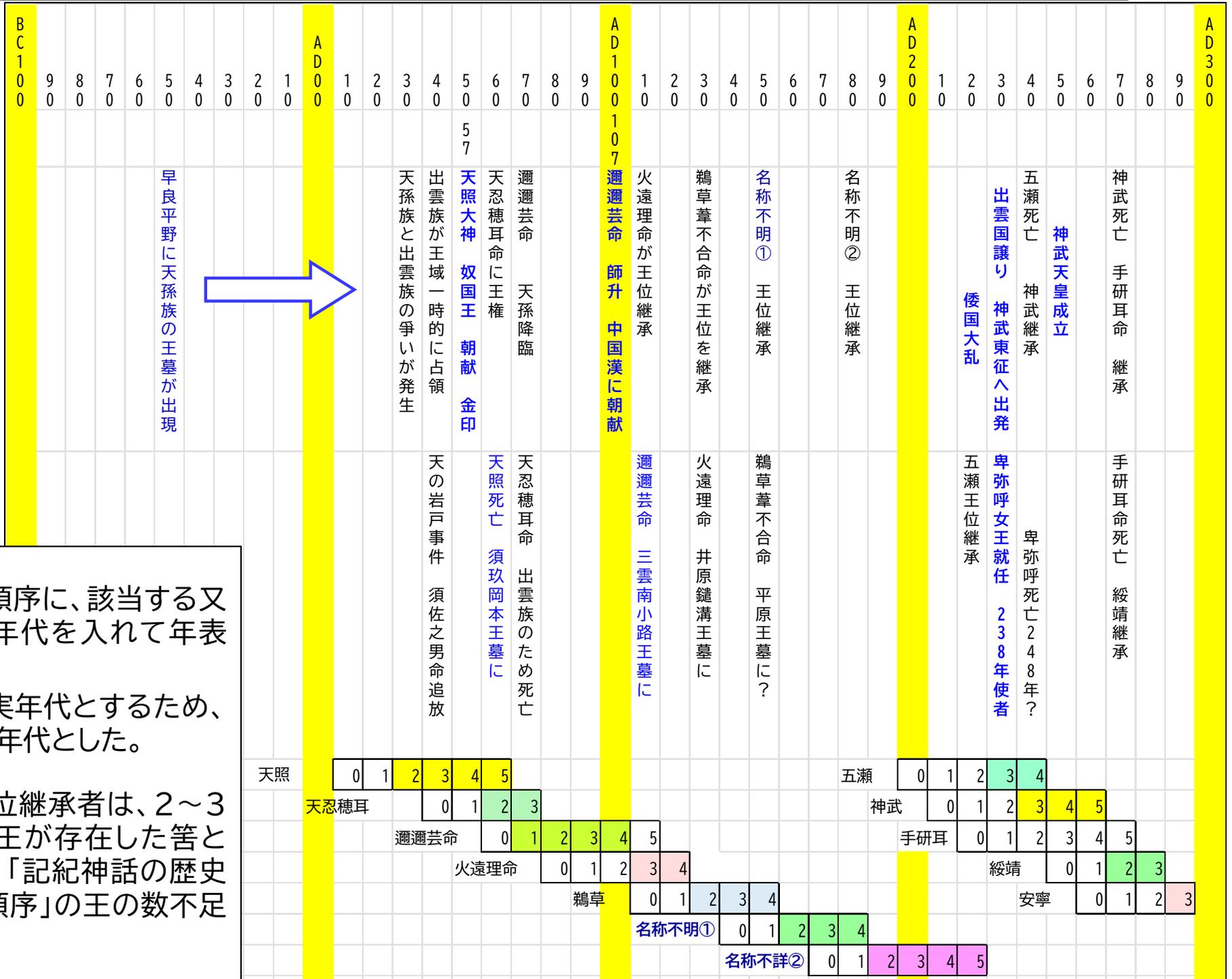


①②③④は記紀の記載順

①②③④⑤は実際の事件の発生順 歴史順

倭国大乱以降に卑弥呼は登場する！

# 43. 「文献と考古の対応:神話の時代全体」の年代整理 の表より



早良平野に天孫族の王墓が出現

- 解析された順序に、該当する又は推定する年代を入れて年表を作成。
- 登場人物を実年代とするため、60才までの年代とした。
- 天孫族の王位継承者は、2～3代は不詳の王が存在した筈と推定される。「記紀神話の歴史として読む順序」の王の数不足と一致。



## 神話の解釈と考古資料を対比・統合した歴史サマリー、倭国大乱直後まで

- 紀元前3世紀：弥生渡来人(倭人)が日本に到来。 稲作を始めた先住の西北縄文人と戦い勝つ。
- 水田稲作・金属器をベースとした高度文明を持った倭人が北九州を中心に、日本全土へ拡散。
- その倭人集団の首長となる天孫族は、北九州の早良/春日・須玖/神崎・吉野ヶ里等に居住。
  - 同じ倭人で対立する出雲族は、遠賀川流域から東に居住。
- 紀元前1世紀：早良平野に天孫族の王墓が出現。天孫族と出雲族の争いが発生。
  - 出雲族が天孫族の王域などを、一時的に占領。(城ノ越土器が一時的に普及。)
- 紀元1世紀：須玖岡本に鉄・青銅等の工業地帯ができ、そこが王域となる。
  - 須玖岡本の王墓:天照大神
- 西暦57年:倭人の奴国王(天照大神)が中国漢に朝献し、金印を受領。 訂正。金印受領した奴国王は天照大神
  - 天照大神死亡 天照大神は、卑弥呼と年代が大きく違う！
  - 天忍穗耳命が王位を継承
    - 出雲族の攻勢が強まり、長男の天火明命を遠賀川流域に送った。(政略結婚・人質?)
    - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、王域を見限り、新天地へ送り出す。→天孫降臨
  - 須玖岡本の天孫族王域は、出雲族が占拠。天忍穗耳命の消息は消える。(金印が志賀の島へ)
  - 邇邇芸命は、前原・糸島地区で、新天地開拓を行い、韓国の鉄を入手し、武器や工業を興伸
- 西暦107年:邇邇芸命は中国漢に朝献
  - 三雲南小路遺跡の王墓に埋葬
  - 火遠理命が王位継承 (兄の火照命が服従を誓い、遠く離れた熊本・菊池地区へ移動)
    - 井原鎚溝王墓に埋葬
  - 鵜草葺不合命が王位を継承
  - その後、2世代の王族が王位を継承。
  - 名称不明の王が立ち、天孫族と出雲族の決戦が行われた。
- 西暦220年代:北九州の大決戦(倭国大乱)が発生。
  - 天孫族が勝利し、五瀬が王位を継承その勢いを駆って、出雲国譲りの戦いを実行し、勝利。
  - 全国支配達成のため、神武東征のため、前原・糸島地区から大和に向かって、進攻。
- 西暦238年:卑弥呼が魏に朝献。 倭国大乱  
以降が課題！

# 天孫族の本拠地の移動

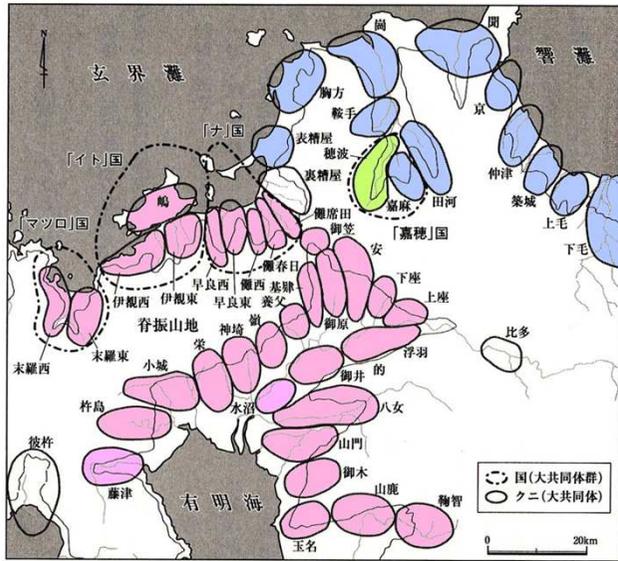


図10 紀元前後の北部九州の部族的国家群（寺沢、2018年より）

←初期の天孫族・出雲族の集落  
 天孫族 → ピンク色  
 出雲族 → 淡い青

## 天孫族本拠地の移動と決戦場



① 紀元前1世紀～紀元1世紀 天孫族の王族が早良平野で、開拓生活から文明生活(工業化)開始へ、最初の王墓が発生

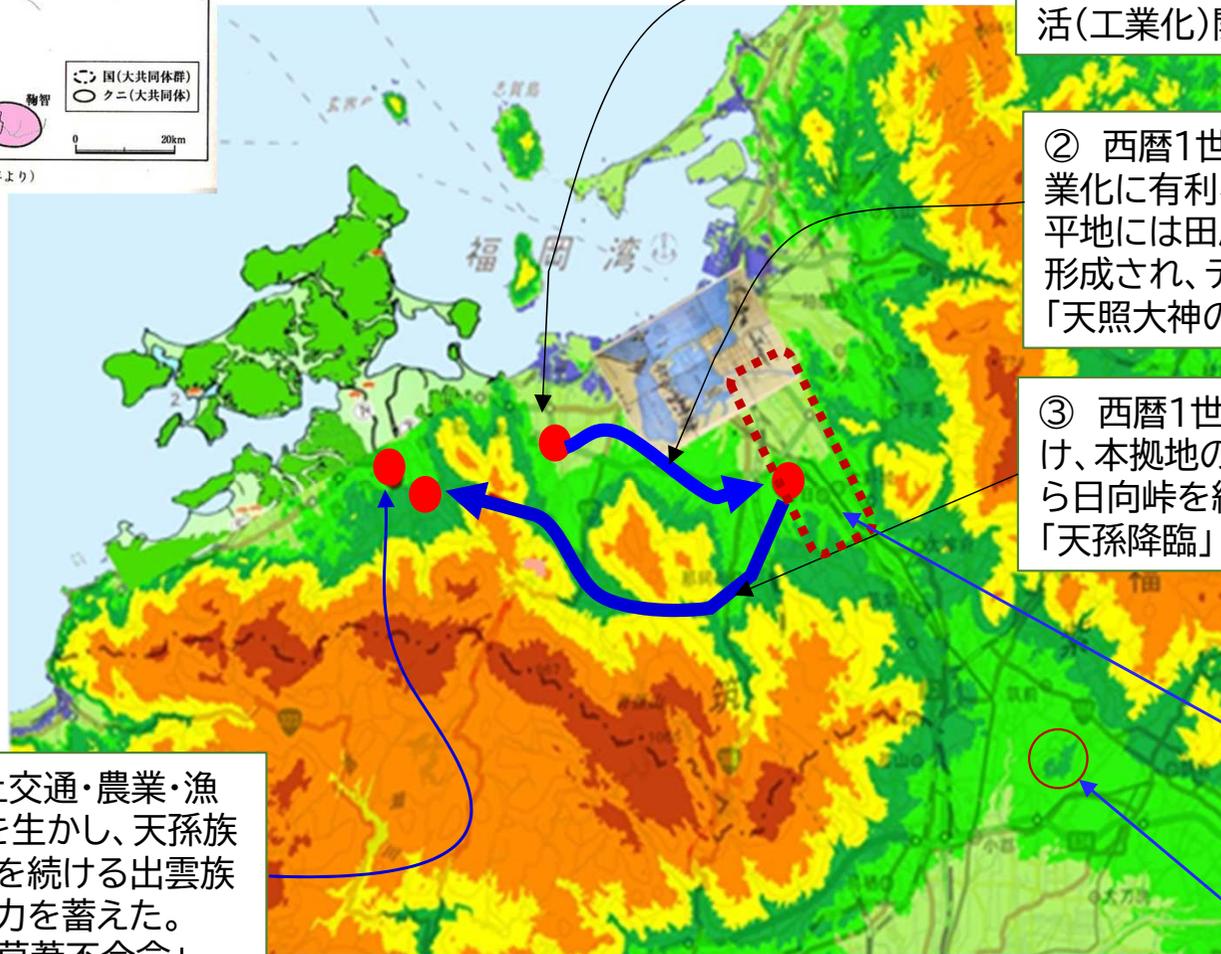
② 西暦1世紀 王族が早良平野から、工業化に有利な須玖岡本に王族が移動。平地には田んぼ、丘陵地には工業地帯が形成され、テクノポリスとなった。「天照大神の時代」

③ 西暦1世紀後半 出雲族の圧力を受け、本拠地の移動を行った。須玖岡本から日向峠を経て、前原・糸島地区へ移動:「天孫降臨」

⑤ 3世紀前半 天孫族は、旧日本拠地の博多平野・須玖岡本付近で、出雲族との決戦を行い、勝利した。「倭国大乱」

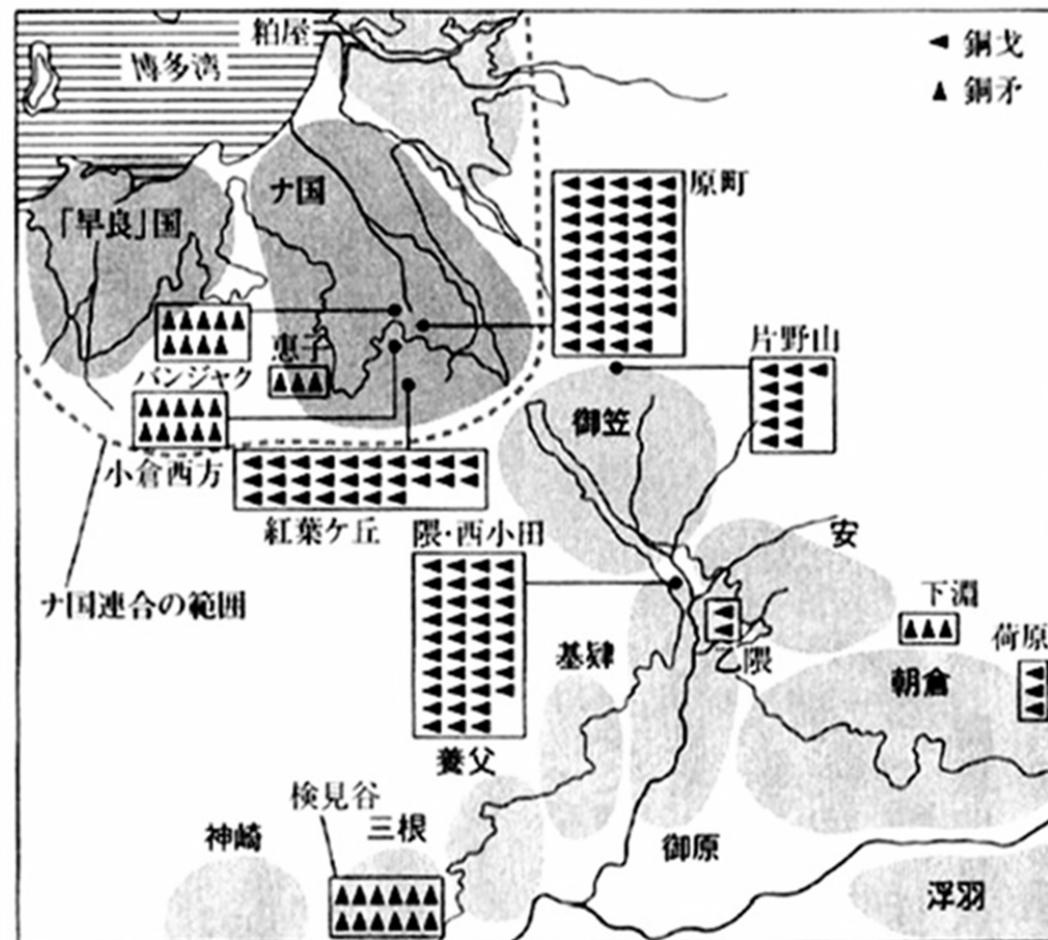
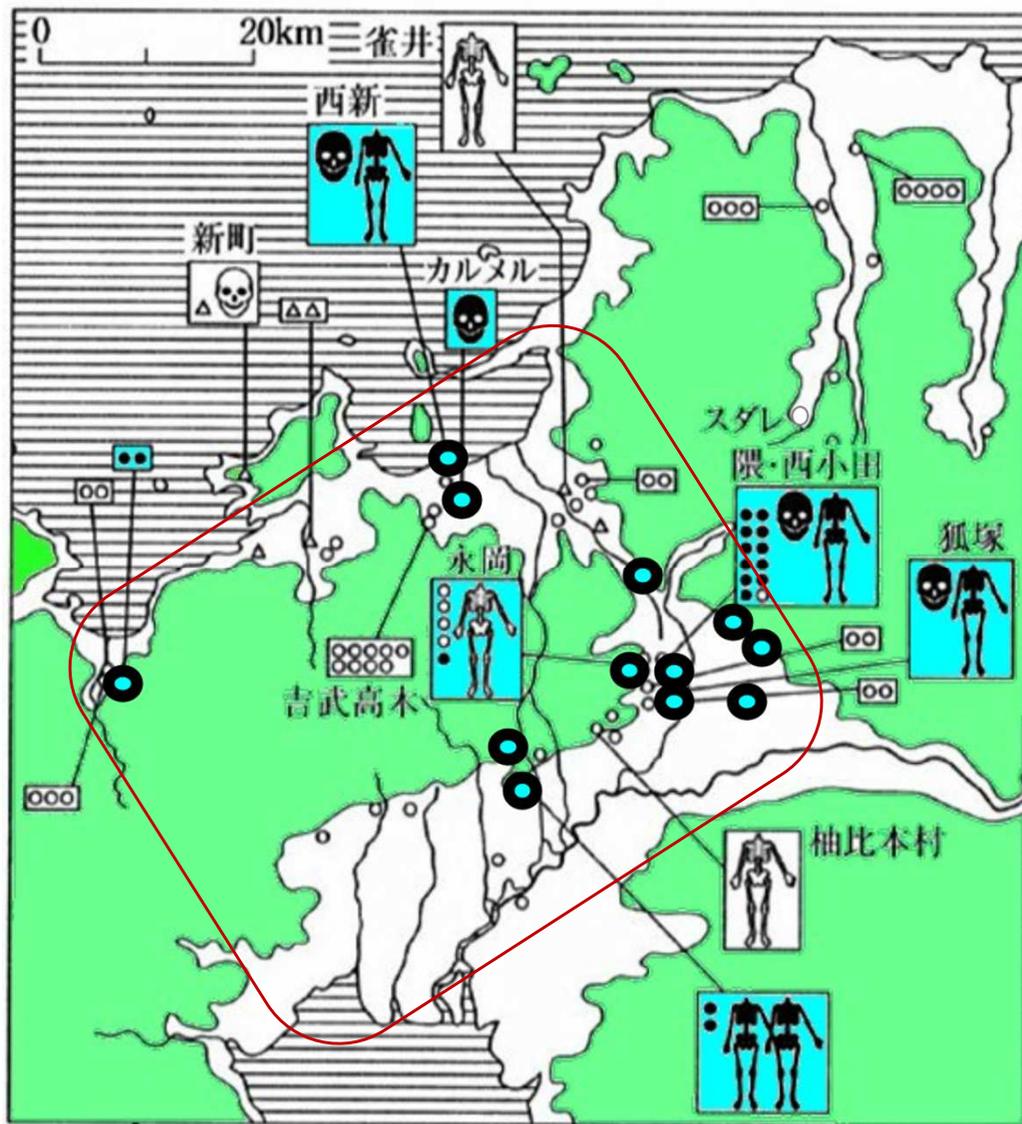
⑥ 卑弥呼 王宮

④ 西暦2～3世紀 海上交通・農業・漁業の良好な地理的特性を生かし、天孫族復活に成功し、武力抗争を続ける出雲族との決戦のため武器・戦力を蓄えた。「邇邇芸命・火遠理命・鵜草葺不合命」



# 戦争遺跡 と 青銅器埋納の跡

● : 中期後半以降



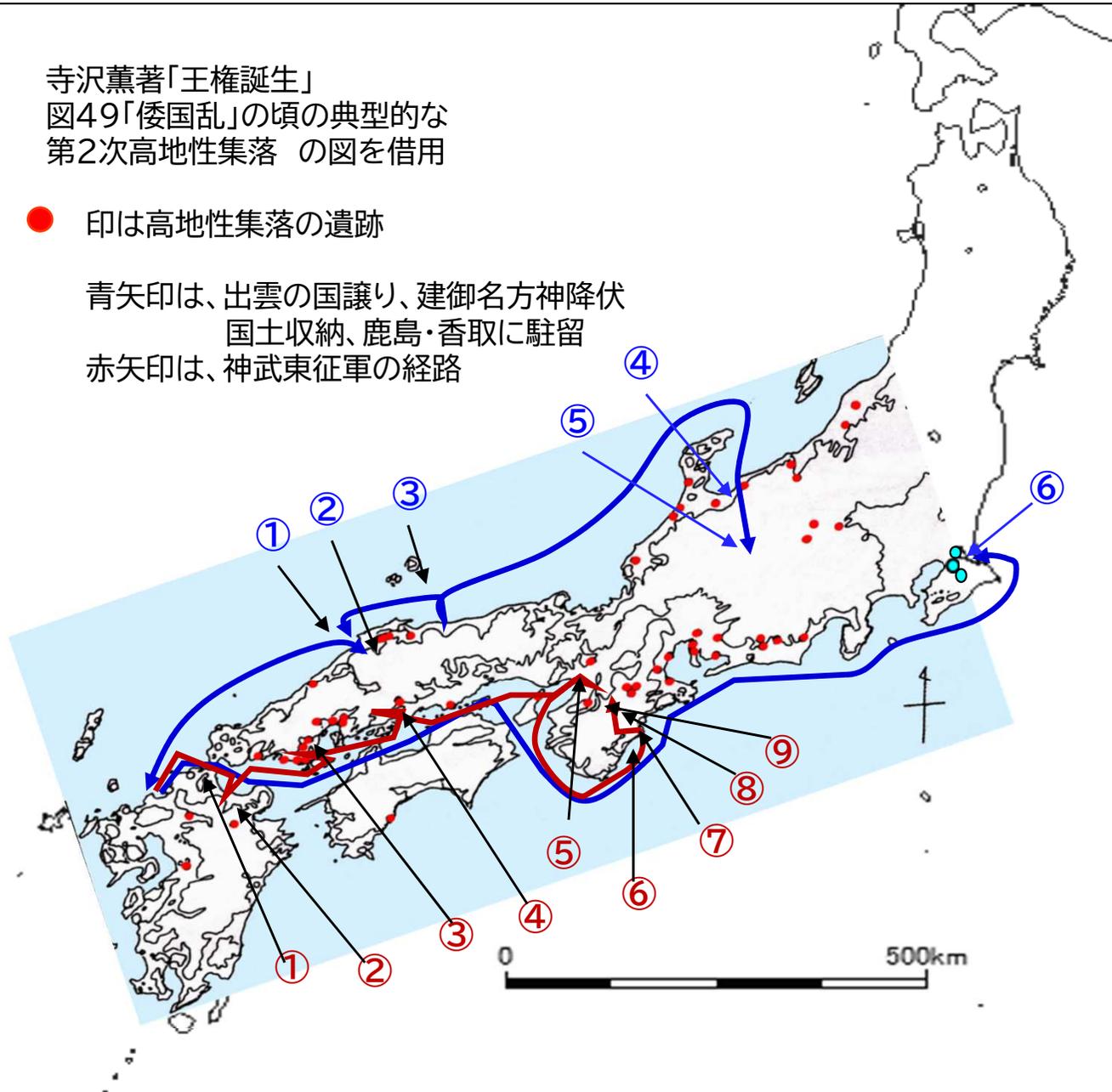
ナ国と周辺のケニゲニの呪禁

# 出雲国譲り・神武東征の経路

寺沢薫著「王権誕生」  
図49「倭国乱」の頃の典型的な  
第2次高地性集落 の図を借用

● 印は高地性集落の遺跡

青矢印は、出雲の国譲り、建御名方神降伏  
国土収納、鹿島・香取に駐留  
赤矢印は、神武東征軍の経路



① 出雲 伊那佐の小濱

② 加茂岩倉遺跡 荒神谷遺跡

③ 青谷上寺地遺跡

④ 糸魚川・上越市 奴奈川姫関連遺跡

⑤ 諏訪神社 柳沢遺跡・松原遺跡

⑥ 香取・息栖・鹿島 神社

① 岡田宮

② 宇佐 一柱騰宮

③ 安芸 多祁理宮

④ 吉備 高島宮

⑤ 浪速 白肩津

⑥ 熊野灘 (遭難)

⑦ 丹敷浦

⑧ 宇陀

⑨ 大和

# 倭国大乱から神武東征までの期間について

## 倭国大乱(北九州の決戦と出雲国譲り)

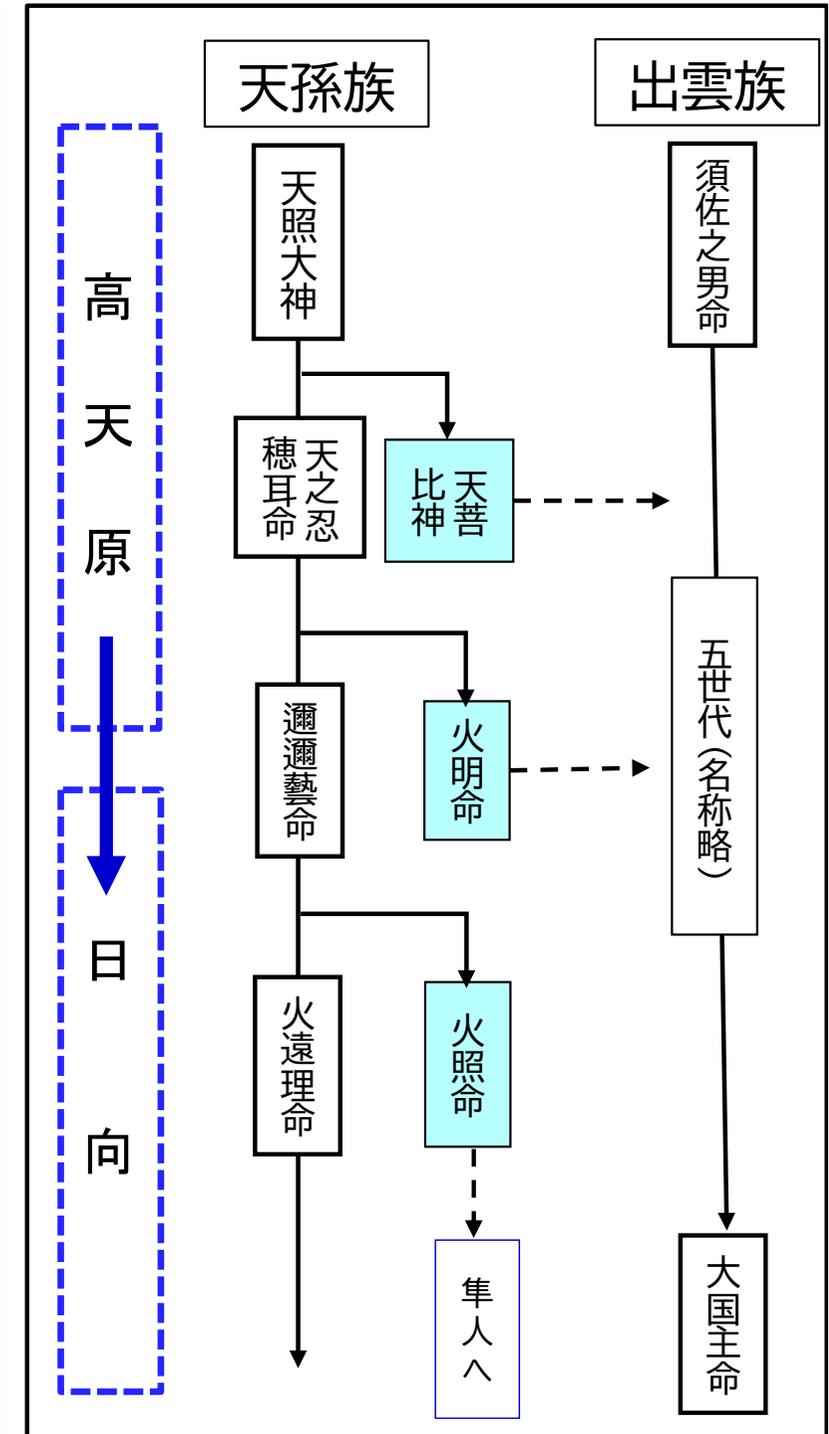
- 天孫族は、前原・糸島地区で、武器・兵力を整え、日本抛地の博多平野・須玖岡本付近で、出雲族との決戦を行い、勝利した。
  - 出雲方の武器型青銅器の埋納が遠賀川流域では出土しないことについて：天孫族は、遠賀川流域まで軍を進め、旗指物である武器型青銅器を戦利品として、日本抛地の須玖岡本付近まで持ち帰り、埋納したと推定。
  - 同様、出土しない山口県にも、軍を出し、武器型青銅器を戦利品として持ち帰り、埋納したと推定。
- 残る出雲族を武力で掌握するために行ったのが、軍船を出し、行った出雲の国譲りとなる。
  - 反抗する建御名方神を攻め、青谷上寺地を攻め落とし、建御名方神を諏訪まで追い詰め、降参させた。
  - 出雲地方に戻り、出雲方の首脳の大国主・事代主から全国の出雲支配下の地域へ、天孫族支配に移ったことを連絡し、全ての青銅製祭器(銅鐸・武器型の全て)を集めること、集められなかったものは、埋納処理するように通達を行わせた。 → 加茂岩倉遺跡 / 荒神谷遺跡 各地の埋納遺跡

## 倭国大乱の結果

- 天孫族の完全勝利で終わったが、天孫族の意図通りに行かなかった部分が残った。
  - 筑後平野南部の出雲族の残存部隊：出雲への帰途が塞がれ、熊本の隼人と合流した。隼人は、海彦山彦の神話の海彦・火照命一族の子孫。
    - 出雲族は、製鉄技術を発揮し、鉄製品を一気に増産し、武装集団に。
  - 出雲の支配地域は、天孫族の想定外の広さを持っていた。
    - 出雲の戦いを指揮した建御雷神命等は、新領地・支配地の東端を抑えたが、余りにも遠い、銚子外れの香取・鹿島で、日本の中心地域(畿内・中部)を抑えるには、余りに遠い処であった。
  - 勝ち取った出雲地域は、天孫族の出雲に派遣された天菩比神(天照大神の次男)の子孫の支配に委ねられた。 → 当初は問題なかったが、後々、問題を起こした。
  - 勝ち取った瀬戸内・近畿・滋賀・名古屋等は、火明命(天忍穗耳命の長男)の子孫の邇芸速日命に支配が委ねられた。饒速日は完全に独自支配し、九州の天孫族の意向を無視し、敵対した。

# 主流から離れた天孫族

- 天照大神の子の**天菩比神**
  - 出雲方へ使者として派遣された。
  - 三年経っても復命しなかった。
  - 出雲方に取り込まれた。
- 天照大神から天忍穗耳命に引き継がれた。
  - 第一子の**火明命**は出雲族の地へ(人質/政略結婚)
    - 飯塚立岩遺跡の大型甕棺に埋葬
    - 子孫に饒速日命が居る。
      - 大和に降臨し、事代主の妹と婚姻
      - 長脛彦の妹と婚姻
        - 神武東征軍を迎え撃つ。
- 第二子の**邇邇芸命**が王位継承。→天孫降臨
  - 日向三代
  - 邇邇芸命の子の**火照命**は、王位継承争いに敗れ、熊本へ追いやられ、隼人の祖先となった。



# 天火明命：饒速日の消息

- 古事記では、**天火明命**は邇邇芸命の兄で、ここでは古事記の記述による。
  - 日本書紀の本文、一書(第3)では、邇邇芸命の子で、海幸彦・山幸彦の兄弟となっている。
  - 日本書紀の一書(第6)(第8)は古事記に同じ。
    - 神武東征の時、大和を護る饒速日命が登場。
- 北九州東部の遠賀川流域には、天火明命(饒速日尊)の伝承がある。
  - 鞍手郡の笠置山頂に饒速日尊が降臨。→神社看板(可児資料より)
- 飯塚市の立岩遺跡では、遠賀川流域では珍しく、甕棺墓群が出土。
  - 前漢境10面出土
- 海部氏の系図では、天火明命＝饒速日尊と記される。
  - 饒速日は、天火明命の子と云う説もある。
- 日本書紀に饒速日が天磐船で大和に降臨したとの記述がある。
  - 旧事本紀に物部に一族である五部人と二十五部人を伴として来たとの記述があり。
  - 鳥越憲三郎氏は、物部一族は北九州・遠賀川流域から渡来したことを割り出した。
- 天忍穗耳命の息子兄弟：**
  - 兄は、遠賀川の流域に移動し、本人か、子孫が、地域の部族を引き連れ大和に降臨した。
  - 弟は、王位を継承し、筑紫の日向の地に天孫降臨したことになる。

## 天照神社(天照宮)

所在地 福岡県鞍手郡宮田町大字磯光字儀長  
祭神 天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、  
八幡大神、春日大神、応神天皇、  
天兒屋根命

大鳴川右岸の宮田町磯光に鎮守する天照神社は、古代から中世に栄えた粥田荘の惣社として古くから人々の信仰を集めた神社として知られています。  
天照神社の由来は、貝原益軒著の「鞍手郡磯光神社縁起」によれば、饒速日尊が垂仁天皇十六年に宮田町の南に聳える笠置山頂(四二五メートル)に降臨し、同七十七年に笠置山頂に奉祀したことに始まります。その後、千石穂掛谷、明野(監野)と移り、延慶元年(二二〇八)年に、白き鶴の住む里に廟を遷すべしとの神託があり、西田探題惣政所玄朝の遠宮により、現在地に移されました。

# 飯塚立岩遺跡

- 立岩(たていわ)遺跡 飯塚市
- 弥生時代の甕棺墓43基、貯造穴26基など。
- 前漢鏡10面、細形銅矛、鉄検などが副葬品として出土。
- ゴウホラ貝の腕輪
- 王墓 10号甕棺
  - 糸島・前原の三雲王墓と同じ立岩(古)に相当
  - 清白銘鏡3面を含む10号甕棺は、夏華の基準でいう侯王墓(王墓では無い)
  - 中細形銅矛の副葬
  - 大型化された武器型鉄器の鍛造鉄戈+鉄剣



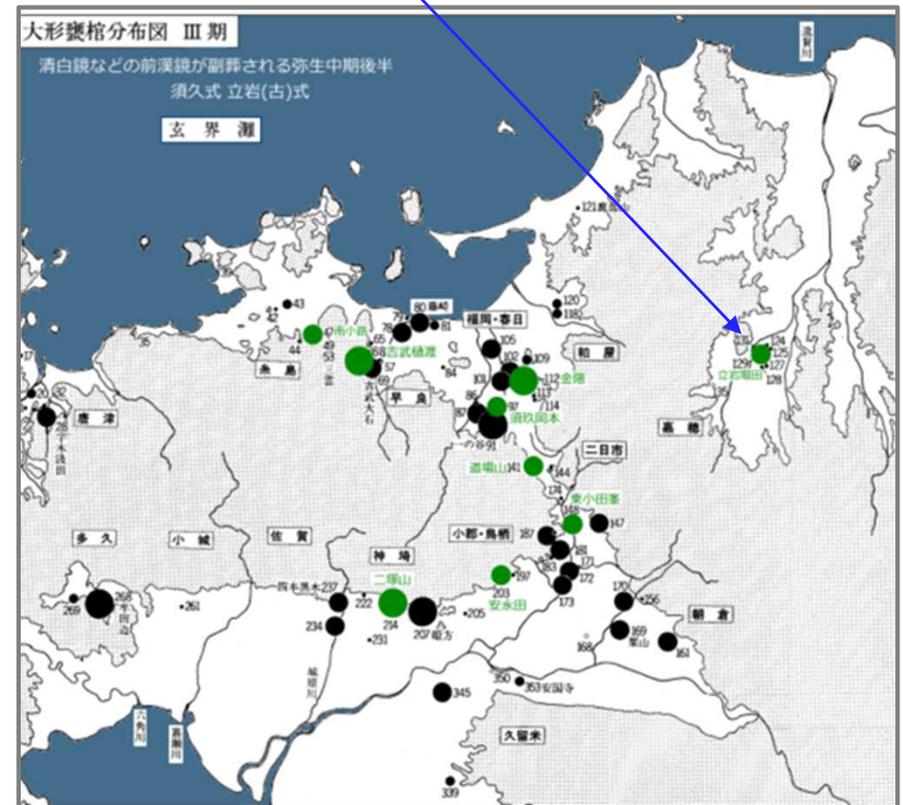
連弧文日有喜銘鏡



## 天照神社(天照宮)

所在地 福岡県鞍手郡宮田町大字磯光字磯長  
祭神 天照照彦天火明櫛玉饒速日尊、  
八幡大神、春日大神、応神天皇、  
天兒屋根命

大嶺川右岸の宮田町磯光に鎮守する天照神社は、古  
代から田代に栄えた宮田荘の惣社として古くから人々  
の信仰を集めた神社として知られている。  
天照神社の由来は、員原岳射野の鞍手郡磯光神社  
縁起にみれば、磯光日尊が天照十八年に宮田町明  
の南に鎮座の五雲山(四二五メートル)に降臨し、あ  
そ七十七年に五雲山頂に奉祀したと伝えられている。  
その後、千五百五十七年(弘治)に足利義元が元禄  
八年に、日産鎮の住持に願を遂げすべしとの神託が  
あり、西国衆、惣政所玄朝の造営により、現在地に移  
された。

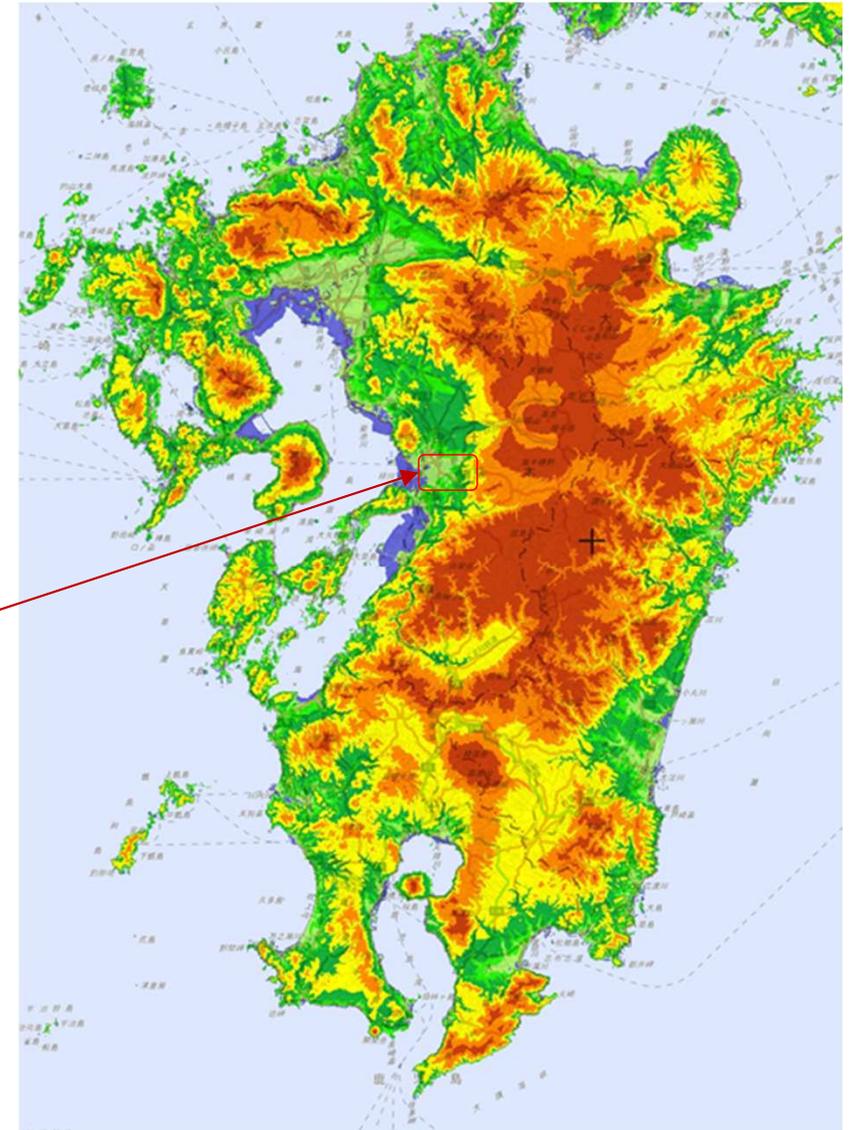
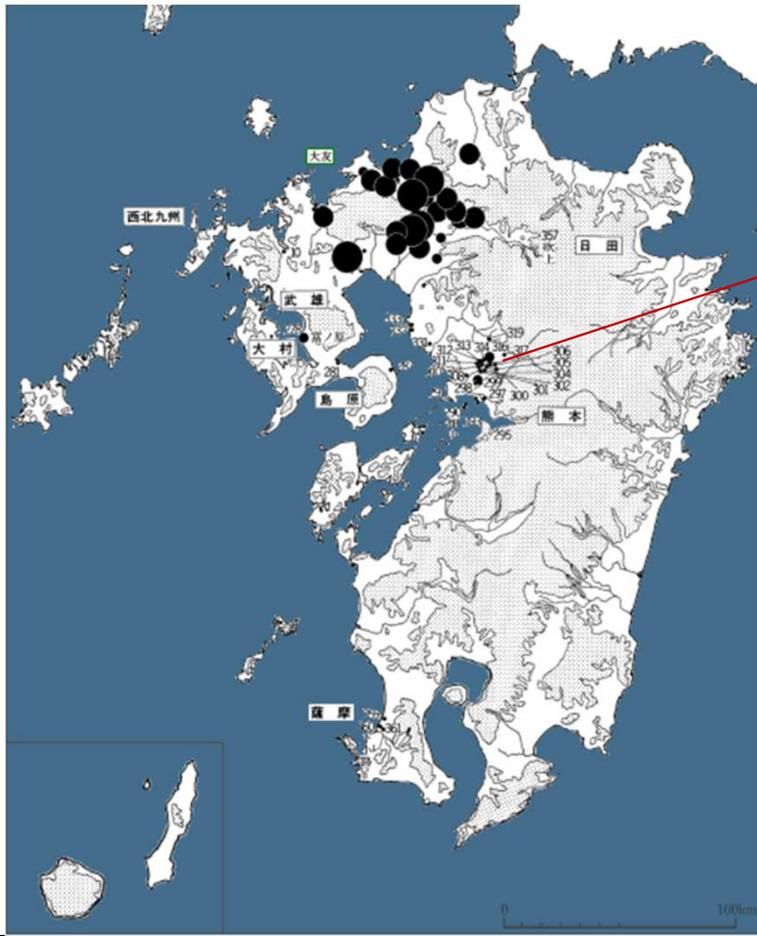


藤尾慎一郎著「九州の甕棺-弥生時代甕棺墓の分布とその変遷-」  
(1988年10月31日稿了) この論文の地図

飯塚立岩の大型甕棺は、二日市で製造されたものと解析。

# 兄の海幸彦 = 火照命の移動先

- 兄・海幸彦は、隼人の祖先になったとされることから、海幸彦 = 火照命が、王位継承争いに敗れ、遠方へ行った土地は、熊本と考えられる。そこが隼人の地で有ると推測する。
  - 甕棺出土地のIII期の熊本に運ばれた大型甕棺が、火照命等のものと推察できる。
  - 熊本に居た隼人一族の主力部隊は、大和朝廷成立後に、大和に移動し、鹿児島や人吉盆地などに居た隼人族は、そのまま、残存したものと推定する。



青地の部分は、弥生時代には海であったと推定する部分。

藤尾慎一郎著「九州の甕棺-弥生時代甕棺墓の分布とその変遷-」  
III期の図

- 出雲族との決戦に勝った天孫族
    - 本拠地は、前原・糸島地区
      - 朝鮮半島の鉄鉱石を製錬して、鉄鋼を輸入し、地場でも製鉄を行っていたと推測。
      - テクノポリスの技術を継承し、鉄製武器・製品の生産や、青銅器・ガラス器などを生産。
      - 三雲南小路王墓・井原鎚溝王墓・平原遺跡があり、八咫鏡など、豪華な副葬品を残す。
    - 軍備を蓄え、高い工業技術力を持って、渡来以来の伝統的な社会性を持った集団。
    - 出雲に対して、出雲が支配する水穂の國は、元々天孫族の支配すべき土地と宣言して来た。
  - 出雲族が完全降伏した時点で、出雲族が支配した日本全土の支配をすべきと理解していたと推定。
- 
- 神武東征の最初の場面
    - 記紀では、突然、東征の場面となるが、順序を正すと出雲の国譲りの完遂の報告を受けて、一族の会議を開いたと見るべき。
    - 何処に本拠地を置けば、天の下の政治をよく実行できるのか？ と問い、東に行くことを決定した。
      - 古事記・日本書紀の双方とも、同様の内容。
    - 日本書紀では、本拠地とすべき大和に、天孫族の饒速日命が居ると示している。
      - この場面では、天孫族が既に入っているとの情報は、容易にその地に入れることを示唆している。
        - 実際には、饒速日命は、九州の天孫族に敵対し、到来を拒絶し、防備軍を構えた。
- 
- 神武東征とは、
    - 単純な戦争・遠征行為では無かった。
    - 大和への政府機関・主都機能の移転であった。
      - 工業技術と移転可能な設備(設備を造る道具)なども含む

- 神武東征決定時の誤算

1. 天孫族の饒速日命が、敵対することを想定していなかった。
2. 建御雷神の神等の出雲征圧軍が、大和から余りに遠い、関東の端に位置し、有効活用ができなかった。
3. 筑後平野南部の出雲族残存部隊が熊本の隼人の支配下に入り、敵対するとは、天孫族の想定は外であった。

# 神武東征軍

- 神武東征の決定後、短期間で東征軍が結成された。
  - 前原・糸島に本拠地を置いた天孫族の五瀬以下の軍勢は、いち早く、関門海峡手前の岡田宮に移動し、1年間の準備期間を経て、東へ出立した。
    - この1年間は、大軍を運ぶ、船舶建造の期間であった。
      - 遠賀川流域地帯は、造船材の供給と共に、造船を行った。
    - 天孫族軍が外の各地から軍備を整え、集合に必要な期間となった。
      - 天孫族軍は、本拠地は、前原・糸島であるが、主要部隊の、早良平野、隈・西小田、夜須、吉野ヶ里、唐津など、脊振山地の周辺の各地から、終結した。
    - 各工業の技術移転も行われたと推測する。
      - 大和への移住のための技術移転準備期間でもあった筈。
    - 神武東征に徴用された兵
      - 北九州居住の適齢期の男子は全て徴用されたと推定。
        - 北九州の暦年に渡る決戦で、死亡・負傷した兵も多かったと思われる。
- 東征軍は、岡田宮から出発し、安芸の多祁理宮へ移動した。
  - 古事記には7年もの長い期間、安芸に滞在と記す。
    - 既に饒速日命側との戦争が始まり、東へすんなり移動できず、安芸周辺の敵対勢力の駆逐が必要となり、厳しい行程となった。
  - 古事記には、吉備で、更に8年費やした。
    - 瀬戸内海沿岸には、敵対勢力が存続したことになる。
  - 出雲国譲り、大国主・事代主の約束は、無視され、饒速日命の敵対策に、苦しめられる事態に陥った。

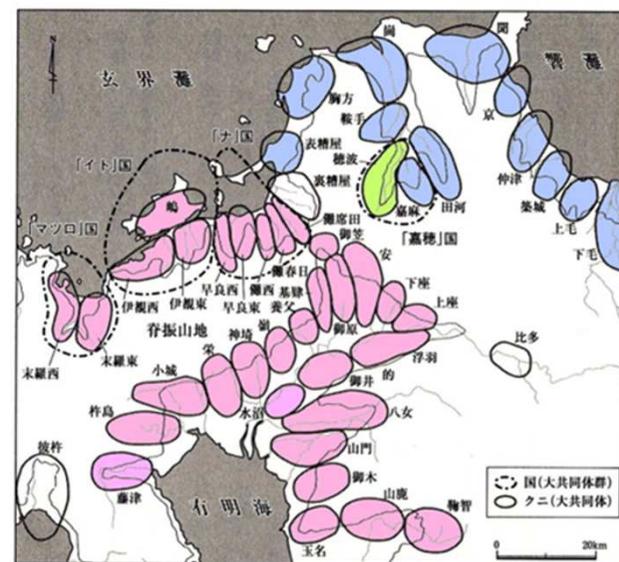


図10 紀元前後の北部九州の部族的国家群 (寺沢, 2018年より)

- 北九州の集落に残された家々には、
  - 元気な男共は残らず、
  - 老人・幼子・負傷兵しか居なかったと推定する。
  - 多くの家庭は、女性ばかりになってしまった筈。
- 敵対した旧出雲族地域への懸念
  - 天孫族側の男共は、かり出され、東征軍として出征してしまった場合、
    - 武力制圧が弱まると、旧出雲族が反乱を起こす可能性が存在した。
- 日本拠地の前原・糸島地区の懸念
  - 糸島は三方が海に面しており、強い武力勢力が居る時には、外部への進出・交流が容易で良い地形だが、守備を考えると、極めて守り難い地形で、この場所では、残存・留守部隊は、守りきることが難しい。
  - 日本拠地の福岡平野の須玖岡本付近は、戦乱で荒廃し、生活基盤に欠ける。
    - 旧出雲勢力が反乱を起こした場合に、守備が難しい。
- 神武東征軍が岡田宮を出立する以前に、天孫族の王である五瀬は、北九州残留部隊の処置を決める必要があった。
  - 東征軍の後に残る残留部隊のことは、王の五瀬が決定し命令するよりも、残留部隊の一致した意見として決定した方が、良いと、五瀬が判断したと推測する。
    - 残留部隊の主だった者達を集め、合議させ、残留部隊の首領を決定させた。
    - 残留部隊が、選んだのは、**卑弥呼**と言う女性であった。（**日御子** が本来の名前だったのでは？）
      - 卑弥呼は、五瀬の関係者(母親・姉・叔母ほどの親族)と推定。選任の理由は：
        - 東征軍との関係が深いこと。
        - 従来政治体制を継承できること。
        - 個人的に優れた、軍事・政治・外交の判断力を持ち、残留部隊が信頼できること。

- 魏志倭人伝の記述内容と、記紀神話の解析と、残存する考古史料から推測する。
  1. 王宮の移転 : 前原・糸島から、少ない兵力で守れる地域へ移動
    - 後の天皇達が選択した方法と同一の選択肢を選んだ。
      - 博多の港から左程遠くなく、太宰府付近の狭隘な地形で守備ができ、広大な農耕生産可能地域を持つ。
        - 神功皇后の松峡宮(福岡県朝倉郡三輪町栗田)
        - 齊明天皇の筑紫の朝倉宮(朝倉橋広庭宮)
      - 城山(花立山)福岡県小郡市干潟に宮室・楼観・城柵を築いた。
  2. 倭国大乱・神武東征の兵士の妻
    - 倭国大乱で戦死した兵の妻や、神武東征へ出征した兵の妻を集め、卑弥呼の王宮で、行政官吏として用いた。
      - 女王の下に置かれた「婢千人」は、残留・留守部隊/北九州の倭国の行政を行う官吏として働いた。
    - 一夫多妻制度容認
      - 男女の極端な比率に対応する処置を行った。
  3. 須玖岡本から太宰府付近を伊都国とした。
    - 奴国に港の管理を行わせた。その後の太宰府の機能と同一
    - 伊都国に「一大率」を置き、女王国以北の旧出雲族支配地を檢察。
  4. 行政・外交
    - 天照大神以来、確立していた行政を引き継ぎ、実施した。
    - 魏志倭人伝に記された外交・税制・法律・裁判・市などの制度は、継承された制度とみる。
    - 外交も神武東征の成功終了まで、独立して、旧天孫族の国家と同様に行うこととした。

## 卑弥呼と神武東征軍との年代対応

- 卑弥呼側に付いては、絶対年代が魏志倭人伝に記されている。
  - 一方、神武東征軍の行動は記紀に記されており、順序は確定するが、年代は決まらない。
  - 卑弥呼側と神武東征側の対応関係を推量しながら、神武東征の年代を推量して行く。
- 倭国大乱・卑弥呼共立 : 神武東征軍出立時に卑弥呼共立
- 景初2年-238年に卑弥呼:使節を魏に出す。
- 正始元年 240年:魏の使節梯儁、倭国に到来
- 正始8年 247年 卑弥呼:魏に使節を送る(狗奴国と不和)
- 248年 魏の張政倭国へ派遣 卑弥呼死亡
- 男国王 王に立つ。國中不服。戦死者千人余り。→248年?
- 宗女 壹与 立つ。張政が擁立。狗奴国問題の記載は無いが終焉。→ 249年?
- 正始元年に、魏の使節梯儁は、卑弥呼女王に、特段の不安感・疑問を示さなかった。
  - 卑弥呼共立後、7-8年以上経過し、国内外が落ち着いた状況であったと推測。
- 正始8年に、卑弥呼死亡し、男王が支持を受けられず、
- 正始9年に、宗女 壹与が、邪馬台国の民の支持を受けたこと、狗奴国問題の解決があったことが発生。
  - この原因は、神武東征が成功し、神武からの使者が邪馬台国へ来たものと推定。
  - 狗奴国の隼人が、記紀に記される宮廷警護者になった事実から推定される。(詳細は次頁)
- 神武東征の所要年数は、古事記と日本書紀では大きな差が有るが、古事記の所要年数を採用し、上記の卑弥呼関連の年代と対応関係を取る作業を行う。

- 狗奴国は、天孫族の火照命の子孫の国＝隼人の国と推定。
- ✓ 記紀では、火照命は、山幸彦の火遠理命に「逆らわず従属する」ことを誓った。
  - ✓ 隼人と記され、隼人は、大和朝廷の宮廷の警備を担当し、特殊な立場を維持。
    - この間の事情を、以下、推論する。
  - 火照命は一族を連れ、熊本の隼人の国に到来。
    - 火照命は死亡し、二日市近辺で製造された大型甕棺で埋葬された。
    - 子孫は熊本に在住。
  - 天孫族・出雲族の決戦時に
    - 筑後平野南側で、負けて、出雲へ退去しそこなった出雲族が隼人へ到来。
    - 出雲族は製鉄と鉄製品製造の技術を持ち、隼人の地で、生産を行い、大量の鉄製武器を製造。
  - 隼人族は、天孫族には敵対行動はとらなかったが、卑弥呼の邪馬台国には、敵対を始めた。
    - 豊富な鉄製武器を持ち、邪馬台国側に侵入し、邪馬台国を混乱させた。
  - 卑弥呼の死後、邪馬台国側に、魏の軍使団が到来し、隼人側の侵入は、収まった可能性あり。
    - 魏志倭人伝中には、壺与を支援したことは記載されるが、主目的の狗奴国に関して記載が無い。
    - 従って、有効な活動は無かった可能性もある。
  - その後、直系の天孫族の使者が到来し、神武が大和で天皇(王位)に付いたので、隼人一族を宮廷警護役として、招待を受けた。「逆らわず従属する」ことを誓った隼人としては、直ぐに、その招待に応じた。

(神武の使者が邪馬台国に、東征成功を伝え、熊野灘の惨事を伝えた処、邪馬台国側から、狗奴国問題の相談を受け、神武の使者は、宮廷警備役の招待を行ったと推測する。)

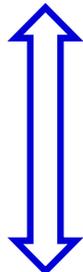
    - 隼人族は、神武の招待を受け、熊本から大和へ大移動を行い、宮廷警備役を受けた。 ← これが史実。
    - 熊本県の弥生時代の鉄製品出土の急増は、突然止まる。 考古学上の事実。

西暦	倭人伝の記述	邪馬台国の王
		男王七 八十年
	倭国大乱 暦年	
		卑 弥 呼
238	卑弥呼朝献	
239		
240	魏の使者	
241		
242		
243		
244		
245		
246		
247	張政を派遣	
248	卑弥呼死去	男 王
249	13才宗女擁立	
250		壹 與
251		
252		
253		
254		
255		
256		
257		
258		
259		

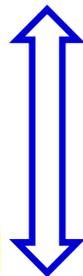
# 卑弥呼と神武東征の年代をすり合わせる



古事記ベース



日本書紀ベース



- 魏志倭人伝の卑弥呼の記述では、
  - 卑弥呼の共立年代は不明。
  - 絶対年代が判る部分がある。
    - 238/240/247年
- 神武東征の所要年数は、古事記と日本書紀では、年代・年数が違う。
  - 古事記ベースでは16年
  - 日本書紀では、8年
 所要年数と順番は、判るが年代は不明。
- 日本書紀ベースの短い期間で、対応を試してみると、合せることは困難。

西暦	倭人伝の記述	邪馬台国の王	天孫族	戦乱		
220		男王七十八年	名称不祥	九州の戦乱		
221						
222						
223						
224						
225						
226						
227	倭国大乱 暦年		五瀬命	神武東征	北九州の決戦	
228					出雲国譲り	
229					岡田宮1年	
230		卑弥呼	神武東征	7 安年芸		
231				16年+α	8 吉備	
232						
233						
234						
235						
236						
237						
238	卑弥呼朝献			男王	大和 侵攻	正妃娶る
239						
240	魏の使者	壹與	神武天皇	大和朝廷 スタート		
241						
242						
243						
244						
245						
246						
247	張政を派遣					
248	卑弥呼死去					
249	13才宗女擁立					
250						
251						
252						
253						
254						
255						
256						
257						
258						
259						

## 卑弥呼と神武東征の歴史年代の整合

- 九州残留留守部隊が成功の知らせの到着を待ちわびていることを、大和に入った神武一行は、十分承知していた筈。
- 少人数で大和に入り成功した神武一行も、誰か、仲間に知らせたい筈。
- 大和侵攻に成功し、戦況が落ち着いた時点で、北九州へ使者を送ったと推定。その時期は、左図の「正妃娶る」の年とする。
- この年を、13才宗女擁立の年に合致させる。
  - 神武東征の年表の出雲国譲りの年と倭国大乱の年を合致させる。
- 以上のように双方の年代を対応させると、対応可能。
  - 魏の使者が邪馬台国に到着した時期は、卑弥呼就任後9年程で、落ち着いて迎え入れることができた。
  - この対比によると、神武天皇即位年は、西暦250年となる。
- 尚、多くの歴史家が、倭国大乱の時期を、後漢書・梁書・北史などの中国史書を根拠に178-184年としているが、第4回の「邪馬台国論・邪馬台国の探し方」で示したように、採用し難い史料であるため、不適切な為、使わない。

- 卑弥呼の時代は、時代としては、神武東征の時代に合致する。
- 卑弥呼は、出立した神武東征軍の北九州残存留守部隊の女王・君主であった。
  - 卑弥呼自体は、天孫族の王家を構成する女性とみる。
    - 神武東征軍の最高司令官の五瀬(神武天皇の兄)の近親・縁者。
- ✓ 卑弥呼の検討から、初代神武天皇即位の年代は西暦250年付近と判明した。
- 卑弥呼の邪馬台国は、神武東征軍の残存・留守部隊ではあるが、
  - 天照大神・邇邇藝命・火遠理命と云った、中国漢王朝に使者を送った奴国・倭国の王の直系の伝統を引いた組織・国家。
    - 30国以上の国々に役人を配置し、その国々を支配下に置く王国を組織。
    - 軍隊制度・税制・商工業監督などの部門を備える政治体制を整備。
    - 法律・訴訟制度を有し、外交儀礼を知り、有利に国際関係を導く知恵を持つ。
    - 魏の使者の報告にあるように、中国側が一目も二目も置くような優れた国家であった。
  - 一般的に留守を護る政権が、独自に外交関係を構築することは無いが、この政権では、外交上有益な機会は、見逃さず取り込んだことは、政権の優秀さを示すと共に、熟成した国家であったことを示す。
- ✓ 残念ながら、卑弥呼・邪馬台国の優れた国家制度・外交能力の蓄積は、大和朝廷には、伝承されることは無かった。その能力を持った人材は、熊野灘の底に沈んだ。

## 残留・留守部隊へ伝わった悲報

- 卑弥呼は、東征軍の「成功の知らせ」が届く前に死んだ。
  - 卑弥呼に従って殉葬された100名もの女性達も、「知らせ」が届く前に死んだ。
    - それは、「悲劇」だ。
- しかし、残留・留守部隊が待ちわびた「成功の知らせ」は、同時に「**悲報**」であった。
  - 家族を、東征軍として出した妻や子。親たちは、自分の家族の生きていることを願った。
    - しかし、東征軍は、神武に近い、ほんの一部の人を除き、全滅していた。
      - 敵との戦闘で死んだのでは無い。
    - **熊野灘を航海中に、暴風に遭い、難破し、海中に沈んだ。**
      - 九州で築き上げた鉄製品・青銅製品・ガラス製品などの最高技術は、その技術を持った人々と共に、熊野灘の底に消えた。
    - ほんの一部の人達が、丹敷浦で助けられ生き延びた。
      - それが、神武一行であった。
- 13才の宗女「壺与」と支えた人々は、その悲報に打ちのめされたかも知れないが、神武の大和政権が十分に成立するまで、邪馬台国・倭国として外交を独自に担った。
  - 西暦266年 倭国 晋に朝献したのは、邪馬台国・倭国の女王壺与と推定する。
    - 西暦266年は、神武年の17年に該当する。

- 「卑弥呼は天照大神。」との説明は、日本人の心を掻き立てる言葉。
  - しかし、天照大神は、西暦57年に中国に朝献し、漢委奴国王と刻まれた金印を受領し、須玖岡本のテクノポリスと称される大繁栄を担った人物。
    - 残念ながら、卑弥呼の生きた西暦238年とは、違う時代の人。
- 中国の歴史書の「魏志倭人伝」と三国志を「史料批判」を行うことと、日本の最古の歴史書の「古事記」・「日本書紀」の記紀神話の部分を、時間軸と空間を整理し直して読み直すこと＝「史料批判」により、古代史の謎の解明が可能となった。
- 日本・中国の文献から史料批判を経て引き出された文案は、考古学の成果である考古史料によって確認され、歴史となる。
  - 考古学に携わった多くの人々のきめ細かい作業が、日本の古代史を支えている。
    - ここに感謝する。